

# 検証 公共事業をめぐる逆風世論

寄稿

## ～道路関連報道に見る基本的国家了解の溶解～

VOL.1



藤井 聡 (ふじい さとし)

京都市立大学大学院工学研究科  
京都市社会学専攻教授

近年、世論により公共事業に大きな逆風が吹いている。果たして公共事業の大半が無駄なのだろうか。関係者ならば、ほぼ全員が知っている。そういう世論の理解は断じて「誤解」であり、「土木技術者は社会的な責任と誇りを持って、一生懸命に国土づくりに携わっている」。今回、新日本コンサルタントの市森友明社長に尽力を頂き、京都市立大学大学院工学研究科都市社会学専攻の藤井聡教授が執筆した本紙への寄稿文を4回に分けて紹介したい。

### 道路行政を巡る否定的報道

政権交代や経済不況などが一般マスコミを賑わせている今日の頃、一頃ほどは「道路」の話題が一般新聞紙面やテレビの報道番組で取り上げられることは少なくともあったようであるが、少し前を振り返れば、かなりの量の報道が「道路」についてなされていた。道路特定財源の一般財源化や暫定税率の話題から、道路財源である59兆円という数字や、1万4000キロの高速道路網計画や費用便益比、道路の中期計画など、少し前なら誰も話題にしなかったようなすこぶる専門的な用語が、連日連夜取り上げられていたのは、まだまだ、記憶に新しいところであろう。とりわけ当時は年間予算6兆

円という数字が衆目を集めていたようであるが、この数字は何も政府が隠し立てしてきたものではなく、誰でも直ぐに調べられる公表値であった。その一方で、この年間6兆円と対比して報道されていたのが、道路行政の「無駄遣い」が如何に多かったかという報道であった。無駄な道路計画、無駄な調査にはじまり、ミュージカル支援や無駄な海外出張など、道路行政に携わる人々の行為がありとあらゆる角度から調べられ、報道されていた。

こうした報道は、今でこそ紙面をにぎわすことは少なくなったようであるが、取り上げるネタがつかれた頃に、再びテレビや一般紙で繰り返し取り上げられるようになってきたことは十分に想像できることである。

番組を見る機会はありませんが、今回のこの道路行政関連の報道は仕事の関係からある程度は見ることができた。その報道を見るに付け、何とも細かいことをよく調べてあるものだと感心せざるを得なかった。

特に一番感心したというか唖然としたのが、ニュースキャスターが事実情報の報道とは別に、相当強い調子のメッセージやコメントを発しているという点であった。

例えば、「道路特定財源が一般財源化することは既定路線ということですが、その一般財源化が形骸化されないように、しっかりと監視しないといけないですね」「皆さん、国に任せてははたしてどうしても無駄な道路がつくられるようですよ。こういった計画は地元で任せるように、財源を地方に譲渡するようにすべきですね」等々。これらは、一つのネタが終わる時の締めめのフレーズとして使われていたものであったが、例えば前者のメッセージは、一般財源化した時に道路行政をどう確保するかを論ずることを封殺する勢いであるし、後者のメッセージは国土的視野からのネットワーク形成という視点が不要であるかのような勢いである。おそらくは、連日ニュースをチェックしていれば、これと同等、あるいはこれよりもっと唾然とするような単純なメッセージが、ニュースキャスターの口から数百万人

数千万人の人々に発信されていたのであろう。

無論、テレビを見ている人々が、「このニュースキャスター、何訳わかんないこといってんだろうねえ」なる反応をしているのなら、筆者としてもなかなか面白い事を言うキャスターだとばかりに落ち着いて見ていられる。しかし、どうやらそうでもなさそうである。細かいことは失念してしまっただが、以前とあるニュースで数兆という道路財源の水準に賛成ですか反対ですかという趣旨の世論調査を行い、実に9割の人々が反対しているということが報道されていた。

繰り返すが、少し前なら大半の人々が年間どれくらいの財源が道路に使われていたかを全く知らなかったはずであるし、ましてや、その財源が「どの様に使われるのか」については現時点ですらほとんど理解している人々はいないに違いない。そうである以上、一今それを持ち出しても詮無い話ではあるが、「普通の庶民感覚」で言うならば、こうした質問には「分からな」と答えるのが筋ではないか、としか思えないところである。が、実に9割の人々が「反対」なる意見を表明しているのが事実である。

このことはつまり、相当程度の人々は、ニュースキャスターの意見におおむね同意しているということの意味しているのである。何とも不条理な話である。(つづく)

# 検証 公共事業をめぐる逆風世論

寄稿

## ～道路関連報道に見る基本的国家了解の溶解～

VOL.2



藤井 聡 (ふじい さとし)

京都大学大学院工学研究  
科都市社会工学専攻教授

### 大衆の気分の増幅装置としてのマスコミ報道

ところでこうした事態がもたらされた図式としてしばしば想起されるものは、(1)報道番組側がある意見を持っている、(2)それを、大衆に報道する、(3)その結果、大衆世論はその方向に流れていく、という単純な図式であろう。しかし、実態は必ずしもそう単純なものではない。なぜなら、この(1)の「ニュースキャスターが持つ意見」なるものの源がどこにあるかと問えば、それはニュースキャスター本人が創出したというよりはむしろ、「大衆の気分」そのものだからである。すなわち、報道番組は大衆の気分が求めるものを提供しているに過ぎないのである。その意味に於いて、報道番組は大衆世論の「生成装置」というよりは、大衆の気分の「増幅装置」であると見た方が適当であると言えらるであろう。

例えば筆者は、こうした報道が繰り返される前に、次のような体験をしたことがある。

筆者は、普段の仕事では道路行政のお手伝いをする事が多い。だからであろう、とある会食の席にて近い人物に「道路って、本当にいるのか？」という質問を受けた。それは純粋な知的好奇心から尋ねているというよりは、当方が道路行政とそれなりの関わりを持っているということを前提に、当方をやりこめることを通じて道路行政を軽く叩いたがってやろうという気配を十二分に漂わせた質問であった。当方としてはそうした気配もあるのだから、それとなく無視しても良かったのだが、一応「道路がない、というのでは交通が立ちいかないので必要なのは当然である。しかし、個々の道路事業については、要る場合もあれば要らない場合もあるだろう」と差し障りの無い形で答えてみた。するとそこからさきに、道路の計画決定についての質問を立て続けに頂戴してしまっただので、「計画決定されたのなら、それをちよっとしたことでも無かったことにする」というのは、あまりにもそれを決めた方に対して失礼である。そんな

ことばかりしていれば、今何を決めるよすがの意味が無くなってしまふ。一旦決めたことは、特に、国が正式に一旦決定したことにしては、よほどの問題が無い限り実行するというのが議論以前の問題だ」とも答えてしまった。どうやら、これが癪に障ったらしく、「そんなのは不合理ではないか。国が決めたよすがが何しようが、要らなければ作らなければいいじゃないか」ということとなり、挙げ句に「それじゃあ、例えば、第二名神道路なんか、要らんのではないか？」と、具体的事例を挙げたさらなる追撃を受けてしまった。しかし、それにきちんと答えるには、実際のところ、それなりの情報がないと判断ができない。そして何より、自らが「決断する立場」にあるのなら、自らの情報量がどの程度であるかはさておき、とにかく可能な限りの情報を集め、その範囲で要る要らないを判断し、決断してみせざるを得ないのであるから、そうしようと思すべきであろう。ただし、そういう局面に直面していない単なる酒飲み話の席のような状況においては、「要るかも知れないが、要らないかも知れない」という事以上は何とも言えない(無

論)「もし、自分が意思決定権を持つなら」というような仮想的議論を盛り込んだ会話をするのはなかなか一興ではあるが、残念ながらそういう楽しい席にはなりそうになかった。それをできるだけ分かり易く説明したつもりであったのだが、通じる気配はない。そんなやりとりの中で、先方から「第二名神道路なんか、絶対要らないだろう」となる発言があったので、ついつい、「絶対」に要るとか要らないとか、そういう断定的なことをおっしゃるのはいかがなものかと強い調子でたしなめてしまった。後はもう、自分のその発言がその場を凍らせてしまったので、この話しはここで終わることになったのだが、いずれにしてもこの話しは、今回の道路特定財源の一般財源化の議論がマスコミで取り沙汰される以前から、一般の多くの人々が、道路行政に対して概して否定的な気分を抱いていたことを暗示しているように思う。こうした気分が大衆の中にあるからこそ、マスコミはことさらこの問題を取り上げていたのである。それがあるからこそ道路の話題が政治課題に登る顛末となったのである。おそろくはこうした大衆の気分の不条理さは、公共事業について誠実に考えたことが有る者ならば誰しもが、容易に理解できるのではなからうか。

(つづく)

# 検証 公共事業をめぐる逆風世論

寄稿

## ～道路関連報道に見る基本的国家了解の溶解～

VOL.3



藤井 聡 (ふじい さとし)

京都大学大学院工学研究  
科都市社会学専攻教授

### 基本的国家 了解と怨恨

ただし、この話しの顛末は、道路行政に対する人々の態度を暗示しているだけに留まるものではないように思う。それは、多くの人々が「国家の決定」や「国民と国家の関係」なるものについての基本的な意味を了解していない、ということさらさら暗示しているように思える。

個人的な事で恐縮であるが、筆者はものごころが付いたころには既に、国家というものを何かしら「畏れ多いもの」として認識していたように思う。この感覚は、しばしば「お上意識」とも呼ばれているものであると思うが、いわゆるサヨク的な気分が大いに支配され、国家というものに対して相当に否定的な態度を持っていた学生の頃であつてすら、筆者はそういう感覚をぬぐえずに抱いていたように思う。もう少し正確に言うのなら、筆者は世の中には「畏れ多

いもの」なるものがあり、その一つに「国家」があげられると感じていたように思う。

ただし、国家は(少々形容矛盾であるが)単に畏れ多いだけのものではなかった。自身の国家は、言うまでもなく「よその国」のようなく、自身と繋がるものであり、かつ、それ故にその振る舞いに自身が影響を受けると共に自身の振る舞いにも僅かなりとも影響を受け得るものと感じていたように思う。この感覚は、先の「お上意識」とは少々異なり、むしろその逆に「自らがお上に立つ」ことを想定した感覚であると言えるようにも思う。いざれにしても、この感覚は、おそらくは先に述べた「畏れ多い」という感覚よりも後の発達段階にて筆者の中に明確化していったものであるかとは思ふもの、それでもやはり、ものごころが付いたころには、その感覚の萌芽は十分にあつたように思う。

つまり、筆者がものごころが付いた時には既に、好むと好まざる

とに関わらず、畏れ多いものであると同時に、自身のあり方に決定的な影響を及ぼしつつも自身の振る舞いにも依存しているものとして、国家を了解していたのである。無論、こうした筆者の個人的な

「国家了解」がどういう代物であるのかを評価する能力を筆者は持たないが、それは何も特殊な感覚ではなく、それなりに社会的、歴史的に共有された感覚であつたように思う。いざれにしても、もし仮に国家と国民の在るべき関係なるものがあり、その基本的な意味についてどの了解を人基本的国家了解と呼ぶとするなら、この人基本的国家了解こそが、先の人物、ひいては昨今の多くの人々において希薄、あるいは、欠落しているのではないかと考えるのである。

もしもこうした人基本的国家了解がなければ、国家などは単にサービスを提供してくれるものに過ぎず、そのサービスを購入するために致し方なくカネを(税金として)払い込んでいられるという機関にしか思えなくなるであろう。そして、そのようなサービス機関に「カネを支払ってやっている」にも関わらず、そのカネを「勝手に無駄としか思えないような事業に年間何兆円もつぎ込んでいられる」とす

るなら、大きな不満を感じることもなろう。そして、その不満を訳の分からぬ国家権力等というものために解消できない気配があるとするのなら、その不満はやがて「怨恨」(ルサンチマン)へと繋がることとなる。ここでもし、この怨恨の気分を抱いているのが周りを見回して自身一人だけであるのなら、その人物は愛想笑いでも浮かべながら我慢せざるを得ないところであるが、周りに似たような怨恨の気分を抱いている人々が少なからずいることに気づけば、ましてや、何百万人、何千万人が同時に視聴しているであろう報道番組の中で同様の怨恨の気分が吐露されているのを見れば、こそぞとばかりにこの怨恨の気分の憂さ晴らし、うつぶん晴らしに走ることもなろう。先に紹介した話においてその登場人物が筆者に聞いたかけたのも、おそらくは、こうした構図があつたからではないかと思つ(事実、先の人物は、自らの正当性を主張する文脈の中で、「私みたいに感じているのは私一人ではない、あなた以外のほとんど全ての人がそう感じているのだ」なる趣旨を恫喝のとも言える語調で主張していたのは非常に印象深いものであつた。

ものごころが付いたころには、その感覚の萌芽は十分にあつたように思う。

(つづく)

# 検証 公共事業をめぐる逆風世論

寄稿

～道路関連報道に見る基本的国家了解の溶解～

VOL.4



藤井 聡 (ふじい さとし)

京都大学大学院工学研究  
科都市社会学専攻教授

## 怨恨の嵐における絶望と希望

さて、もしも、怨恨を軸としたこうした世論の構図の描写が射たものであるとするならば、この事態を根こそぎ改善するためには、一々問いかける質問に真面目に答えるだけでは不十分であることは間違いないであろう。なぜなら、道路行政に対する様々な質問や疑問は、真理の探求のために投げかけられたものではなく、怨恨に基づく攻撃に他ならないからである。個々の質問に対する真面目な回答は、個々の攻撃を防御するために必要であったとしても、攻撃意欲そのものを減退させるものではない。

こうした攻撃の勢いそのものを断ち切るためには、まずはその「怨恨」の消滅を目指せばならぬであろう。そして、そのためには、基本的国家了解がその人物の精神の根幹に立ち現れることを期待せねばならぬであろう。

それが、この平成の世論において可能であるのか無いか、残念ながら、それをここで断定的に論ずることはできない。もちろん、この平成の世論を一瞥する限り、万人の精神の内へ基本的国家了解が立ち現れる事など絶望的であると思える。とはいえ、何が起ころうともそれが不可能だとも断ずることもまた、できないのである。

いずれにしても、不条理な批判を多数浴びることがあろうか無からうが、公共に資する事業を為す必要性は一切変わることはない。ある道路が求められているのなら、やはりそれを作らねばならないし、ある橋が必要であるならそれを作らねばならない。仮に不条理な世論のためにそれが作ることが難しくなっても、激流や堅い岩盤故にその事業の遂行が難しくなることもあり得るのだから、それと同じような困難が技術者の前に立ちほだかっているのだと言ったこともできよう。そんな時には、誠実なる技術者なら、激流の水理を

学び岩盤の力学を冷静に学びつつ、激流や岩盤に如何に対峙しているように、そこに不条理な世論があるのなら、その世論が如何なる意味において不条理であり、その不条理さの根底に如何なる怨恨を含めた諸種の感情が潜んでいるのかを冷静に理解していくことが求められているのである。

そうである以上、われわれは、この公共事業に対する逆風世論にうろたえる必要など一切無い。かつて先人達が、様々な困難を前にたじろぎそよになりながらも毅然と対峙し、乗り越えて来たように、われわれもまた、この逆風世論に如何に対峙し、その問題をどう乗り越えていくべきなのかを考えねばならないのである。そのように考えることができるのなら、如何なる批判を浴びようとも、うろたえ、自らの意気を消沈させることなく、肅々と、そして力強く、公共に資する日常の業務に携わり続けることができるに違いない。そしてそうした力強さこそが、現代の土木技術者に、今、われわれに求められているのである。

【筆者プロフィール】  
1968年奈良県生まれ。京都大学卒業後、同大学助手、助教授、

スウェーデン・イエテボリ大学客員研究員、東京工業大学助教授、同大学教授を経て、現職。  
専門は土木計画、交通計画ならびに、公共問題のための心理学。動的交通需要予測研究で98年土木学会論文奨励賞、社会的シレンマ研究で03年土木学会論文賞および07年文部科学大臣表彰・若手科学者賞、認知的意思決定研究で05年日本行動計量学会優秀賞(林知「天賞」)を受賞。また06年に「村上春樹に見る近代日本のクロニクル」にて表現者奨励賞、08年に「モビリティ・マネジメント入門」にて交通図書賞を受賞。著書は「社会的シレンマの処方箋」「土木計画学」合意形成論(偏著)、「土木と景観(共著)」「社会心理学の新しいかたち(共著)」等多数。

今年6月には、京都大学の学友である新日本コンサルタント(富山市吉作)の市森友明社長の達ての願いから、同社創業30周年記念講演会で「築土構木としてのコミュニケーション」をテーマに特別講演を行っている。

なお、今回の寄稿は、新日本コンサルタントの市森友明社長のご尽力により実現しました。心より感謝申し上げます(編集部一同)。

(おわり)